

はじめに言い出したのは

県教育庁教育政策課長

狩 屋 幸 司



中学校の同級生と再会した際、学校の怪談の話になった。母校は、昭和初期建造の木造校舎を現在も使用していることで知られる。怪談は、その古い建物を題材にした他愛もないものだったが、「有名な話だったよな？」と聞かれ、「聞いたこととはある。」と答えた。実は、私が創作して密かに流したものだっことは言わずにおいた。その同級生にしてみれば、出身校にも「有名な怪談」があったのが嬉しかったのかも知れない。私が黙っている限り、彼を落胆させずにすむ。

どんな話でも、必ず最初に言った人がいるはずだが、広く知られた話でも、それが誰なのか不明なもの山ほどある。

その一つ。吉備津彦命と温羅の伝承が桃太郎の原話になったと言う説は、多くの岡山県民に受け入れられている。伝承は、地名・地形・遺物等を見事に織り交せて、想像力と躍動感溢れる出色の出来で、それだけでも他県に誇れるものと思っっているが、いつの時代の誰の知恵か、さほど似ているとも思えないお伽噺との少々強引に見える考証により、全国レベルの有名人を郷土ゆかりの英雄として引き寄せた手腕に敬服する。駅前の銅像は、今や県内外の認める岡山のシンボルだ。

もう一つ。「教育県」も、いつ誰が言い始めた

のか明確でない。どの時代の、どのような状況を指した呼称なのか、今となつては特定が難しい。

これまでも繰り返し問い返され、昭和の終わり頃にも県教委内部で検証が行われたことがある。当時の資料が手元にならないのだが、閑谷学校以来の庶民教育の伝統、寺子屋・私塾の多さ、女子教育の先駆的取組、旧制高校や医専の存在、戦後に至っては、子供たちの習い事の盛んさ、家庭のピアノ保有率まで列挙しつつ、「古くからの教育熱心な県民性から教育県と呼ばれたと思われる。」と結ばれていたように記憶している。

その頃すでに提唱者も根拠も不明だったが、私は、本県の教育関係者あたりの言葉が他県にも伝わったのではないかと推測する。ただ、言葉自体が残って来たのは、そう呼ばれたことに県民が誇りと愛着を持っているからだと思っっている。熱心な県民性が健在であることは、県立図書館入館者数等が日本一を続けていることにも現れている。

「教育県の復活」は、怪談でもお伽噺でもない。「晴れの国おかやま生き生きプラン」の重点戦略である。再び県民が自信を持つて「教育県」を自称する日が来るよう、効果的な施策・事業に全力で取り組んで行かなければならない。